【　歴史&宗教　No005-3　】［神仏同座］山形県内

１．出羽三山神社の取り組み

まずは、私が感動した記載の一説を取り上げる。出羽三山神社第 22 代出羽三山神社宮司を歴任された阿部良春氏著「出羽三山の信仰と伝統」（東北出版企画）より抽出する。

「(91 頁～93 頁)・・・出羽三山神社は、今日神道を以って奉仕している神社であるが、1400 年の歴史は日本固有の自然崇拝、山岳信仰を基底に古神道、道教、仏教、陰陽道、修験道等諸々の「宗教・宗派」をよく集合させ、他に類例のない本邦屈指の霊場を形成してきた。今日、神社の祭儀や奉仕する形に中にはそうした“宗派の教義・作法”が色濃く残されている。・・・“信じる者”には等しく大神の“徳”をさずけ、生命の甦りを説かれてきたのである。それは現代に連綿と伝えられる。・・・それは一に、羽黒山麓集落・羽黒町手向の「宿坊」の努力に負うところが大きい。・・・単なる一神社の宗教行事に終わるものではなく、日本人の宗教文化あるいは日本そのものを見つめ、反省するまたとない機会である。――（230 頁）――明治維新の『神仏分離令』により、神道式と佛教式に分かれてはいるが、その期するところは一つである。・・・」

現在の宮司の考え方も継承していると思う。

加えて、私がこの眼で見た実態だが、羽黒山神社境内には、仏教そのものの梵字（キリーク）が刻字された古い墓、供養塔が沢山ある、歴代の別当、宮司の仏式墓も沢山ある。それも、同社が管理し周囲はきれいに下刈り整備していた。

同社は、戦後の宗教法人法の規定を受けた神道であり、神社本庁が包括している神社ではあるが、前記のとおりの伝統を重んじた取組みが現れている。

（１）霊祭殿

三神合祭殿に向かって右奥へ回り込むと、図－20 のとおりの「霊祭殿」がある。一度、内部にお邪魔し神職と懇談した時がある、れっきとした位牌が並べられている。明治以降、先祖祭祀は基本的に仏教が役割を担い、神道で祖先を祀ること（祖霊供養）は一般的ではなくなったが、ここは同社の施設において神職がお守りしている。仏教職を色濃く残しているという状況にある。　2025（令和７）年３月 15 日（土）岩鼻通明さんの講演を聴講したが、その時“神社本庁からは煙たがれている”という話を紹介された。

この建物の右手には図－21a のとおりの左手に墓場、右に経木塔婆が林立している。古い墓石の梵字（図－21b）は一切消されていない。

図－20

（２）「千佛堂」

図－22a 新聞記事のとおり、これはすなわち仏像安置堂であり、2017（平成 29）年 7 月 10 日に建設・完成した。合祭殿横の参集殿と、亡き御霊の供養を行う霊祭殿の間に建設されたものである。寄進された仏像のために多額の資金を投じて建設したが、日常管理はもちろん出羽三山神社の神官（神職）である。竣工式では、同じ舞台（場所・空間）で、同社の神職が神道式神事を、同地元の正善院と金剛樹院の僧侶が仏教式法楽を挙行したという。・・・神仏並座・同座の姿は何と素晴らしいことではないか、心から敬意を表したいと思う。

そこで、2018（平成 30）年 7 月 20 日（金）現地に行き確認して来ましたが、この報道のとおり図－22b（本来は撮影禁止？）の状況である。

図－21a

図－21b

山新 羽黒山

散逸の仏像、一堂に

安置堂完成 神仏融合で竣工式

2017 (H29) 7/1(土)

鶴岡市の出羽三山神社（宮野直生宮司）に仏像安置堂「羽黒山千佛堂（せんぶつどう）」が完成し10日、竣工（しゅんこう）式が行われた。神仏習合時代の羽黒山に祭られていた仏像・仏具計約250点を収蔵。竣工式は明治以降初となる、神道式と仏式を融合した形で行われた。

羽黒山はかつて、羽黒修験道の中軸として多くの寺院が立ち並び繁栄した。しかし明治政府の神仏分離政策で神社になると、仏教色は一掃され、仏像・仏具は散在した。

当時、酒田で大工を営んでいた故佐藤泰太良（やすたろう）さんは、散逸の憂き目に遭った仏像群を生涯かけて収集。ひ孫の完司さん(86)が1974(昭和49)年、同神社にすべてを奉納し、出羽三山歴史博物館に展示してきた。

千佛堂は木造平屋建て高床式。延べ床面積約100平方㍍で、参集殿、霊祭殿と渡り廊下でつないだ。総事業費は7千万円。収蔵した仏像は如来、菩薩（ぼさつ）、神将など多種多様で、制作時代は平安から江戸と幅広い。

竣工式には関係者約50人が出席。同神社の神職が神道式の神事を、地元の正善院と金剛樹院の僧侶が仏式の法楽を順次行った後、胡弓奏者による演奏で完成を祝った。

完司さんは「独立したお堂を建ててほしいと、お願いしていた。願いがかなってうれしい。ぜひ多くの皆さんから参拝に訪れてほしい」と話した。千佛堂は無料で通年拝観できる。

に入るタイミングなどをした。動きのそろったチンスを見せた山形北高3熊沢莉奈さん(18)は「選の先頭で会場に入るの笑顔で盛り上げたい」とていた。

㊨出羽三山神社に完成した仏像安置堂「羽黒山千佛堂」㊤「羽黒山千佛堂」の竣工式が神道式と仏式を融合した形で行われた後、胡弓奏者による演奏で完成を祝った＝鶴岡市

図－22a

図－22b

（３）湯殿山参籠所

図－23は、物故者の霊を祀る霊祭殿（左）と神棚（右）が同座の形式・構造を取っていおり、仕切りはない。

私は内部に入り現状を拝観していますが、写真が広角でないことから千歳栄さんの本から借用しています。現地一見ではこのとおりで神仏一体の祀り方です。

参籠所内の祭壇　左・霊祭殿（仏）　右・神殿（神）　湯殿山参籠所

図－23

（４）歴代別当の墓石群

図－24a の場所に古い墓石群が７個所ほどある。破尺堂の墓地群といい、歴代の羽黒山内旧寺院別当と旧寺院関係者の墓石ということであった。

今、この墓石群においても、羽黒山内同神社管轄区域内に他にも沢山の古い墓石（図－24b）が遺されているが、梵字が消されずに残っている。明治の神仏分離においては初代宮司西川須賀雄のやり方であれば、悉く梵字の墓を倒したり、刻字を消したり出来たはずである。なぜそうしなかったのか？　同神社歴史博物館の学芸員に尋ねた処「墓だからでしょう！」という一言であった、つまり、墓は単なる石ではない、死人の霊魂が詰まっている、それらに追い打ちをかけるようなことはさすがの西川宮司もしなかったのであろうか。

（５）その他

湯殿山においては、御宝前（秘所）参りに当たっては、靴・靴下を脱ぎ裸足になってお祓いを受けてから向かう、神職の禊払いを受けて穢れを嫌う聖域結界に入るが、親族死者の戒名を書いた人型（神切れ）を岩に貼り付けて、先祖（岩）の死霊供養をする。また、月山頂上においても月山神社本宮の石囲いの一角に死者の供養を行う祖霊社がある。

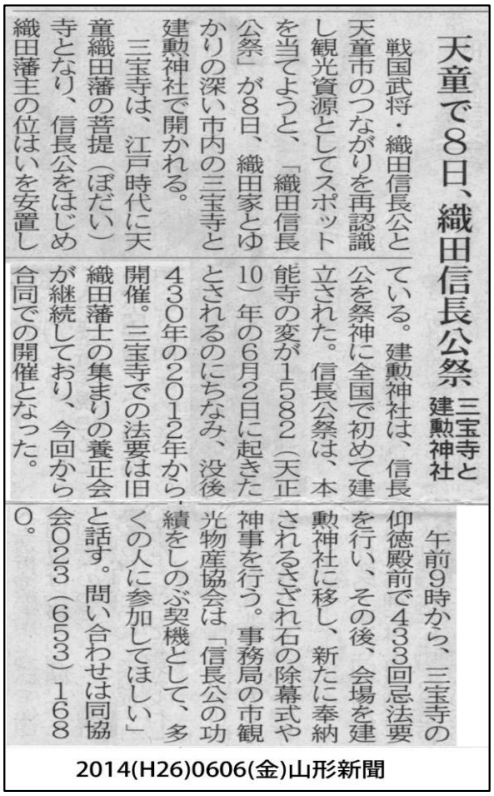
図－24a

図－24b

２．天童市の織田信長公祭（図―25）

当日の 2014(平成 26)年 6 月 8 日（日）参加して来た。参列者は、招待者を含めていわゆる関係者が殆どのようであった。本祭り行事の趣旨・意義は、同図のとおりで、当日もそのような順序で催行された。図-26a は三寶（宝）寺に於ける織田宗家御霊屋（おたまや）での仏事法要、図-26b は建勲（たけいさお）神社での神事祭式の様子である。私が注目したのは、寺院三寶寺と神社建勲神社が合同開催した事であった。織田信長公の遺徳を偲ぶに誠に相応しい行事であった。この織田信長公の祭式に関心を持ったのは次の理由がある。事前に取り寄せたパフレットに依ると、菩提寺である三寶（宝）寺は 1469(文明元)年の開山で、御霊屋（おたまや）は 1830(文政 13)年三月造営したとされる。　一方、建勲神社については、山形県のインターネットホームページの「山形漫歩」サイトに次の案内掲載がある。「明治維新の際、天童織田藩は、官軍(新政府軍)に味方した事、藩祖信長の功績を讃えて、明治政府より信長に建勲神（たけしいさおのかみ）の神号を賜り、建勲神社として、1870(明治３）年に日本で最初に舞鶴山に祀られました。はじめ、『健織田社（たけしおだのやしろ）』だった名称を改め、『建勲神社』となりました。」

信長は、1534(天文３)年 5 月 12 日、天童からは遠く離れた尾張国（現在の名古屋市中区）の戦国大名・織田信秀の嫡男として生誕した人だが、同神社がその信長を祀った最初の神社と言うのです。織田



天童で8日、織田信長公祭 三宝寺と建勲神社

戦国武将・織田信長公と天童市のつながりを再認識し観光資源としてスポットを当てようと、「織田信長公祭」が8日、織田家とゆかりの深い市内の三宝寺と建勲神社で開かれる。

三宝寺は、江戸時代に天童織田藩の菩提（ぼだい）寺となり、信長公をはじめ織田藩主の位はいを安置している。建勲神社は、信長公を祭神に全国で初めて建立された。信長公祭は、本能寺の変が1582（天正10）年の6月2日に起きたとされるのにちなみ、没後430年の2012年から開催。三宝寺での法要は旧織田藩士の集まりの養正会が継続しており、今回から合同での開催となった。

午前9時から、三宝寺の仰徳殿前で433回忌法要を行い、その後、会場を建勲神社に移し、新たに奉納されるさざれ石の除幕式や神事を行う。事務局の市観光物産協会は「信長公の功績をしのぶ契機として、多くの人に参加してほしい」と話す。問い合わせは同協会023（653）1680。

2014(H26)0606(金)山形新聞

図-25

図-26a

図-26b

宗家御霊屋（おたまや）の歴史は古いが、同神社創建は明治維新後なのです。同神社は明治維新直後の神仏分離（廃仏毀釈）施策後の、1870(明治３)年に創建され、いわば新しいのである。古い歴史の寺院と歴史が浅い神社が連携して祭式・祭典を行った意義は大きい。繰り返すが明治の神仏判然令布告の後で生まれた新しい神社である。純粋な国家神道に支えられた神社だったはずである。そこが、歴史の深い寺院と同じ目的（信長公の慰霊と供養）に向かって、直列的・線形的に動いたという。

３．蔵王地蔵尊の例大祭

蔵王地蔵尊保存会－－－事務局は蔵王ロープウェイ㈱）－－－主催の蔵王地蔵尊春季（例年は 5/24）・秋季（例年は 9/24）大祭を取り上げる。図－27ab を参照のこと。

図-27a

図-27b

お地蔵様は仏教の信仰対象である菩薩の一尊である。釈尊（仏陀）が入滅してから弥勒菩薩が成仏するまでの無仏時代の衆生を救済することを釈迦から委ねられたとされている。御承知のとおり日本における民間信仰では、道祖神としての性格を持つとともに、「子供の守り神」として信じられて来た。本件地蔵尊は安永 4 (1775)年に諸願成就・災難除けとして宝沢の庄屋によってこの場所に、37 年もの年月をかけ建立されたとされる。その供養のために関係者が集まって大祭を行っている。新型コロナ終息後の大祭には是非とも行ってみたいと計画している。そこで注目したのが祭儀の中身である。お地蔵様は明らかに仏教の証の一端である、その前での祭儀は、神職の宮司が典儀－－仏式の導師と同じ、神道儀式の進行を司る役目の通称－－となって神式で行う（係って 40 年以上）とされる。建立以来神職がずうっと係って来たそうである。図－27b 下の手前 3 人は後ろ姿であるが、蔵王温泉青年団の「天狗」役とのこと、そもそも天狗とは諸説はあるが、いわば護法善神である、すると仏様の化現（けげん）であるお地蔵様を明らかに神様の仲間と見て守護するという訳である。

山形県にとっての蔵王は重要な観光資源の一つである。当然、観光行政の関係者も参加する。宮司が典儀であるから、お地蔵様の面前で参加者一同もちろん柏手を打ち、宮司は祝詞を上げる。参加者の一部には違和感を覚える人もいたようである。なお、寺院関係者は呼ばないとのことである。

どこかにも記述したが、私は思うに、寺院（僧職）は神社神道・神式に抵抗はなく、逆に神社神道（神職）は寺院・仏式に抵抗感を抱く度合いが強いと感じて来た、その中でこれら関係者の勇気に感激し敬意を表する。

４．威徳寺（山辺町大塚）のこと

本堂内部は図―28 のとおり。真言宗のお寺であり御本尊は大日如来である。2021(R3)年 10 月 18 日

図 5-28

（月）午後、本寺に赴いて、参拝・拝観して来た。特に御幣（梵天状）を立てていたことが目に付いた。御幣（梵天）は一般的には、神職がお祓いや除災の加持祈祷に使う小道具である。それを寺の本堂祭壇に堂々と飾っている、住職自ら必要（要請）に応じて、神職に成り代わりお祓いの儀式を行うようである。１人の人間が僧職と神職を行き来（往来）するのである、１人２役である。何と柔軟で大らかで素晴らしいことではないか。

ところで、山形市十日町にあるある寺院（成□山□勝□帰□院）に参拝に行った時、前記威徳寺同様に御幣（梵天）が立てられていたので「住職が御幣（梵天）を以って除災祈祷するというのは神仏混淆のシンボルであり素晴らしいですね！」と褒め称えた上で、「その所をスマホカメラで撮影したい」とお願いしたら「神社本庁から文句を言われるので写真撮影はダメ！」と言われた。私は内心驚愕した、実に他愛ない（思慮分別の体脳がない）！　除魔の御幣振りは神社本庁（神社神道）の専売特許なのか？いいえ。　誰々が、何々の職業が御幣（梵天）を振ってはだめだ（私幣禁止）とは宗教法人法に書かれていい、憲法にも書かれていない。世の中には、このような狭隘な思考で「ネット包囲リング内１人相撲場」（＝ア縫自＝阿呆児テリトリー）内であがき、他人を騙くらかしてその内に引きずり込み、他人を言葉巧みに誑かす宗教者がゴマンと（数多）いるようで、要注意です。

５．近郷の札所に残る神仏混交の証

ここでは、鳥居に着目して最上三十三観音霊場の二つを取り上げる。

神仏混淆時代の鳥居は、主に神を守護する目的の旧神宮寺的性格と、主に仏を守護する目的の鎮守社的性格の二とおりがあり、娑婆との境界に設置する、いわゆる結界を成す目的で設置する。

図 5-29a は６番札所平清水観音堂であり、図 5-29b は７番札所岩波観音堂である。いずれも、参道入り口に鳥居があって、階段を上がって行き最奥に札所がある。両者共にその内部に安置する諸仏を守護する神社の性格－－鎮守社を以って結界の意を現したものであった（ある）と思う。

図 5-29a

図-29b

（end）